資料3

まちづくりの“ツボ”マップ作成に向けたヒアリング結果

【実施概要】

○６月２７日（木）　会場：第１会議室

時間	カテゴリー	ヒアリング対象課
10:00～11:00	出産・子育て	健康推進課、町民福祉課
11:00～12:00	地域コミュニティ	（地域コミュニティ関係者）
13:00～14:00	医療・介護	健康推進課、高齢あんしん課 （医療・介護関係者）
14:00～15:30	市街地、商店街	まちづくり推進課、産業振興課 （商業・商店街関係者）
15:30～16:40	観光、関係人口 歴史、文化（祭り）	まちづくり推進課、追分観光課、社会教育課 （観光関係者、追分関係者）
16:45～17:30	まちづくり活動	（まちづくりカフェ） ※まちづくりカフェ拠点にて

○６月２８日（金）　会場：第２会議室

時間	カテゴリー	ヒアリング対象課
9:30～10:00	公共交通	まちづくり推進課、高齢あんしん課、 町民福祉課
10:00～11:00	教育・人材育成	学校教育課、社会教育課
11:00～12:00		

「まちづくりのツボ」に関する情報　【出産、子育て】

【出産対応】
- 初産は、町外の病院に行く必要がある。町内の病院では、普通分娩のみ対応。
- 緊急出産は必ず道立江差病院を経由して対応している。
- 今のところ医療機関の連携はうまく行っている。今後はこの機能の維持が課題。
- 健診は主に道立江差病院など町内病院で対応している。
- 道立江差病院にヘリポートがあるが、ドクターヘリの利用はまだ少ない。
- 妊婦さんから病院への交通手段がないという悩みは少ない。自家用車が多い。

【乳幼児対応・発達支援】
- 町内には児童発達相談の医師がいない。→町外の医療機関
- 就学前の悩み相談は、役場（保健センター）が応じている。乳幼児の発達相談は上ノ国（子ども発達支援センター）と連携しながら、保健センターで相談を受け付けており、一定数利用されている。

【保育園・幼稚園】
- 幼稚園は、私立の江差幼稚園、公立のあすなろ幼稚園は今年度をもって閉園。
- 江差幼稚園（私立）では、就園前の預かりを行っている。
- 親がどこの保育園を選ぶかは、自宅や職場に近いことが条件となっている。
- 保育士が不足している。保育園が統合されても必要な保育士の数は変わらない。
- 保育園は、市街地内に1箇所（かもめ・70名）と日明、水堀（合わせて40名弱）の3園に統合された。今後10年で、日明・水堀が建物老朽化のため、更新を機にさらに3園から2園への統合も検討。
- 立地条件は、水堀保育園は、厚沢部川の氾濫を警戒が必要な地域で、日明保育園は、急傾斜地となっており、一長一短がある。また、将来の利用人数は20名弱と推計されるので、保育園単独でなく学童などと複合化が想定される。
- 災害安全性では、柳崎が高台なので有利だが、学童との複合化を考えると柳崎には小学校がないので立地は考えにくい。
- アンケート結果では、「水堀保育園」と「日明幼稚園」を統合してリニューアルするという意見が最も多かった。
- 保育士の確保が今後の課題。3園が2園になっても必要人数は変わらない。
- 道立病院内に看護師さん向けの院内保育所がある。

【子育て相談】
- お母さんたちの集まる場として、育児サポートサークル「キティ」がお薦め。だが最近利用者は少ない。
- 厚沢部のトドック（コープさっぽろ運営）では商品を紹介し、遊ばせながら気軽に子育て相談できる場がある。
- 日明保育園が子育て支援センター機能として月３回開放（年間280件利用）。かもめ、水堀も別の日に開放。
- 遊びに行くついでに相談できる環境が望ましいのでは。

【学童保育所】
- 「学童保育所」は、学校の近くにあることが重要である。
- 学童保育所の「つばさ児童会」は、南が丘小学校を利用しており、玄関が小学校と共用で先生に鍵を開けてもらう。江差小は玄関が別である。
- 学校と学童保育所を共用すると動線上が錯綜したり施錠など管理上の問題がある。
- 施設利用について学校サイドと学童サイドが定期的に話し合いの場を設けている。
- つばさ児童会では、南が丘小学校閉鎖の時に臨時で南が丘ふれあいセンターもしくは五勝手屋生活館を使う時もある。
- 江差北小学校の学童は教員住宅を改修、父母会が運営。施設の老朽化、手狭が課題。移転の目星になる建物はあるが、利用するには改修工事が必要。
- あすなろ幼稚園廃園後に学童保育所（なかよし児童会）を移転する。ただ学童だけだと部屋が余るので、子供と老人等が交流できる拠点・複合施設を検討する。

【小学生】
- 通学は、徒歩が基本となっている。
- 今の子どもは、忙しい。塾（市街地に公文）、スポーツ少年団に通っている。
- 家の周りで遊ばなくなった。
- 江差町に向かう本町の通りは道が狭いといわれていた。子どもが減少しスクールゾーンから外れた。

【遊び場】
- 遊具がある公園は、えぞたて公園、茂尻児童公園。松の岱公園は、遊具が利用できない。
- 図書館に遊び場があってもいい。小学校体育館、水堀プール、鷗島など
- 「遊びの広場」を発達障害の子どもたちに開放している。保健センター内で隔月で開放していた。
- ベビーカーのお母さんが車で子供を連れていけるところがあれば良い。
  ⇒かもめ島・開陽丸が使いやすくなると良い。
- 空き家を利活用して、子供の居場所・遊び場となる場所を作れると良い。
- 雨の日に遊び場がない。近くに遊び場がない。⇒子供の遊び場ニーズが多い。
- 子供を遊ばせながら親が子育て相談できるところがあると良い。

【発達支援（上ノ国）】
- 「たまみずき北海道（NPO法人）」は、上ノ国で小学校の児童デイサービス等児童発達支援をおこなっている。
- 上ノ国までバスで通う子もいたが、「バスの時間がうまく合わない」、「バスに乗れない子がいる」等で、今は自家用車で通う子が多い。

	行政区域
	都市計画区域
	用途地域
	国道
	道道
	市街地内幹線道路

「まちづくりのツボ」に関する情報　【地域コミュニティ】

【町内会の担い手】

・主に市街地では高齢化、人口減少で町内会活動の担い手が減っており、将来町内会を合併しないとやっていけないような状況。合併に対する意識は、町内会の規模（例えば100人以上、100人未満）によっても違うかもしれない。
・町内会の合併は考えられたとしても、山車が合併することは考えられないと思う。
・江差町人口が昭和53年に14000人、現在は6,000人と8,000人減少している。減少した8,000人のうち6,000人は若者であり、それだけ若者の人口減少が激しい。
・町内会では総じて次を担う若い世代がいない。町内会単位でみると新入小学生が１人もいない状況。
・昼間働いている人が町内会活動に参加するのは難しい。さらには定年しても再雇用で働いている人も多いので、60歳を過ぎても町内会活動に携わることができない。

【祭りと町内会】

・姥神町で昔は「夏レク」を祭りに絡め山車の後引きと合同で実施することで、参加もそれなりにあったが、今は誰も集まらない。祭りの時しか人が来ない印象。
・本町では山車と町内会が連携して飲食を通して後引きに集まれる場を提供している。
・姥神町でも若い人は祭りには熱心に参加するが、日頃の町内会活動は全くしない。
・祭り当日の参加者は外からの帰省組がほとんど。日頃は町にいない。

【町内会と生活支援】

・買物バスがなくなって残念に思う町民の声が多く聞かれる。特定のスーパーだけが移送の目的地となってしまったため休止している。
・プレミアム商品券は、今は住宅リフォーム目的に交付されているが、町内の商店で買い物するのに利用できないか。
・町内会はどの世代でも問題を抱えており、例えば高齢者の安否確認なども自主的に担っている。また、行政サービスとの窓口にもなっている。
・高齢者の安否確認については、日常的に個人どうしで電話等連絡とったり、個人レベルで見回りしたりしているので、しばらく見かけないとか、自然に近隣の人の異変に気付ける環境ではあると思う。ただし、アパート住まいの若い年代は把握しづらく、挨拶してもなじめないケースもある。
・町内で顔を合わせる場所があるといいが、人との交流を嫌がる人もいる。
・冬期間の除雪も担い手が高齢化して大変である。

【防災】

・市街地の主要な備蓄はNTTにあるが、町内会によっては100円ショップなどで災害備蓄用の袋を購入し、パンや水を配布している。全域でなくてよいが、要所に備蓄することは必要。
・水堀町では自家発電機を備えていると聞く。
・新栄町、愛宕町は、高台から近くないまたは山側に逃げる経路が整っていない。
・町内会では避難を支援すべき人がどこにいるのか概ね把握している。しかし、いざ逃げる時の対応が問題。（助ける人がいるのか、地勢上津波の到達時間が短い中で助ける時間があるのか）
・避難の支援は町内会を細分化した班単位で動くのが望ましいが、難しいのでは。津波の到達時間が短いと、自分が逃げるので精一杯かもしれない。

【「まるやま」など】

・「まるやま」などでは、カラオケや体を動かすなど目的のある人が利用している状況である。

【南が丘】

・南が丘もカラオケなど楽しむことを目的に利用するケースが目立っている。

【北部の町内会】

・北部の町内会は小さいもので10世帯単位。農業など同じ生業で生活しているため、町内会以上にコミュニティの結束が固い。

【新栄町】

・新栄町ではカラオケ使用料金の徴収や山車の保管料の徴収などで次第に利用されなくなった。

【愛宕町】

・愛宕町では活動が活発で、自分たちで自主的に管理している。母ちゃん食堂もある。

【五勝手】

・五勝手町内会では小中高校生の郷土芸能の練習（獅子舞など、2、3月）、祭りの太鼓の練習（7～8月）

【陣屋町】

・陣屋町でもカラオケ、健康体操などで一定程度利用されている。

【姥神町】

・姥神町は官庁街で一般の町民が少ないところ。漁村センター（S54築）は管理を民間に委託しているが、建物・設備も古く冬は寒くて利用できない。（昔は利用者が多く冬も暖かかった）
・祭りの準備には漁村センターを使わず「一番蔵」（歴まち商店街管理）を利用している。

【柏団地】

・柏団地、函館バス営業所があり、人の出入りが多い。集会所は建物が立派でトイレが浄化槽になったが、あまり使われていない。また他から引っ越してくる人が多いので、行事をやりにくい。

【集会所の利用】

・町内会館の利用は、現在高齢者が多いため昼間の利用が目立つ。若い人が利用するには会館時間や利用料金の改善が課題になるのでは。
・しかし一方で、昔厳しかった使用のルールが緩和され、今では祭り関係の利用は無料になっている。
・町内会館（集会所）は、場所によって宿泊の可否が異なっている。（使用のための規約、条例、導入した補助金の規定により制約が課される）
・葬儀で集会所を利用するケースもあるので、祭りの時に宿泊できるなど多目的に利用できるようにしては。
・昔は葬儀に100～200人集まることを想定して集会所の規模が設定されたと思うが、今は家族葬で小規模になったり、民間の葬儀場を使うことが多いので、今後は集会所はもっとコンパクトでもいいのでは。
・集会所の利用は22時までしか使えないところがある。
・施錠せず自由に使えるように解放できるとより利用されるが、防犯、火の始末などが課題になる。
・老人クラブでは楽しみ、健康づくりが主な活動目的となっている。

「まちづくりのツボ」に関する情報　【介護・医療】

【全般】

・共生型社会では、介護・医療など多様な分野が連携した拠点が必要とされるかもしれない。
・南檜山で医療と介護の専門職で連携会議をおこない、情報共有を行うようになっている。
・将来、高齢者が減少した場合（少子高齢化の次の時代）には、医療や福祉施設を縮小しなければいけない時代が来る。
・健康増進について、ノルディックウォーキングや転ばん塾などの取組みを行っている。マイレージの付与などで健康増進を促進する取り組みがあっても良い。
・買い物や通院などの公共交通の課題。バスの本数や経路の問題も。タクシーも台数が少なく、20分待ちになることもある。
・医療サービス受けるなら、ドクターヘリもあるが、時間や天候による制約もあり、陸路も重要。
・地域と個人がつながる場があれば良い。町内会が担っていた役割や役所とのつながりなど見守りが必要。
・高齢化率が60%に達している五厘沢では、中心市街地への移住を望まず住み続けたい人が多い。このことを踏まえ国は在宅医療を推奨するが現実的には難しい面もある。
・地域の医療は、松前町立松前病院の赤ひげ先生のようなスタイルが合っているかもしれない。

【医療】

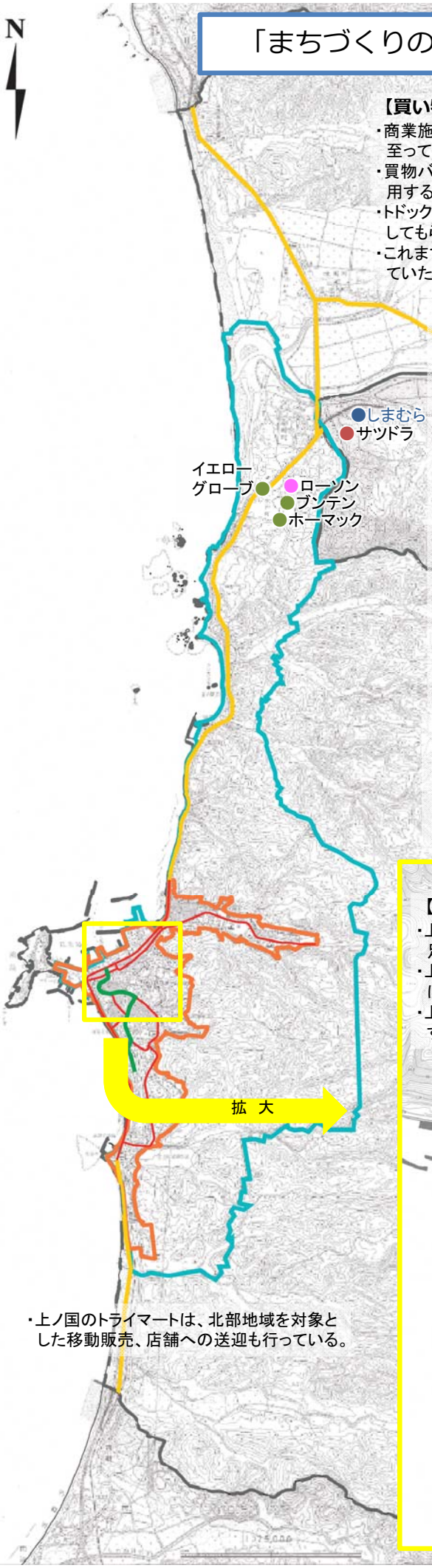
・地域医療構想があり、檜山では回復期、慢性期のベッド数を確保することとしている。（急性期の病床は函館）病院同士が連携・分担して医療をおこなっている。月に一度の受診（内科が中心）
・薬の処方は、地域医療（一次医療）の仕事。一次医療が町からなくなれば町民が困る。一次医療や、二次医療（北海道立江差病院）で対応できないことは函館の病院が対応する。
・佐々木病院では、患者数が若干減少した。（年間2万人から1.9万）
・内科健診や予防接種も医師が必要。（高齢者だけでなく教育現場でも）
・患者が少なくなっている。原因は、函館の病院に行っていることが考えられる。他の病院に行く理由として、買物の用事など、他の用事と一緒に函館の病院に行っている、道立病院は先生が頻繁に変わってしまう（半年に一度）、など。
・夜間休日の緊急医療の当番は、何とか回している。以前は4つの民間病院で対応していたが、今は2つの病院で対応している。厚沢部と乙部も一緒に対応している。
・平日17時から21時までは江差・上ノ国の医療機関で当番を対応している。
・課題はお医者さんの高齢化が進んでおり、10年後が心配。
・地域に一次医療の新たな医療機関を誘致することについては、緊急医療当番を回す上でも地域として歓迎されると思う。

【介護】

・都市マスでは地域で支える観点から入所でなく通所のデイサービスに着目：田沢のデイサービスあかり、カタセールえさし、デイサービスまるやま、デイサービスかもめ荘
・デイサービス機能は足りていないように思う。訪問看護ステーションが1箇所しかない。病院の先生との連携、薬の管理をする薬剤師の確保など役割分担しないとニーズに追い付かない状況である。
・介護のアンケート結果では、80%以上が今の住居に住み続けたい、次いで出来れば近隣施設に入所して地域に残りたいという結果となっている。
・常にヘルパーステーションで介護職の募集をかけている。看護師は処置のみ行い、薬の世話はしないようになった。ゴミ捨て、買物支援などヘルパーでなくても出来ることは地域に委ねるようにする。
→生活体制整備事業で住民活動に切り替える（互助の考え方に基づく取組み）
・町内会に担い手確保が厳しいことなどを踏まえ、コミュニティで支える互助のしくみ・機能を考えていく必要がある。
・65歳以上の人口が48%となる2025年までに地域包括ケアシステムを作ることを目指す。
・移動の手段も、医療と買い物など誰もが使えるものがあるとよい。
・介護に限らず、地域とつながる場所・拠点の必要性もあると思う。
・ケアマネージャーなど資格職は全国的にも不足し、地方では特に顕著である。
・介護職の人材が不足し、高齢化が進んでいる。看護師も同様。外国人の受け入れを検討している事業所もある状況。
・しかしながら、少子高齢化の次の時代に高齢者が減ると、介護職が供給過多となる

・市街地南部には医療・介護はない。施設医療や福祉のサービスを利用する際や、買物に行く際には、移動手段が必要となり、車への依存が高くなる。

「まちづくりのツボ」に関する情報　【市街地、商店街】



【買い物環境】

・商業施設は、以前はラルズ以外にも大型の店舗は2つあった。しかし商業施設が淘汰され今に至っている。現在も商店は1～2軒ずつ減り続けている。
・買物バス、H27年まで運行していたが今は廃止している。医療や福祉目的の移送と複合化して利用するのであれば、道立病院近くの店舗の利用が有利になるかもしれない。
・トドックなど配送サービスやかける君などの通販も普及している。その中で中心商店街をどう利用してもらえるか。
・これまで「追分カード」があり、これのポイントをためることが町内商店を利用する動機付けになっていた。しかしキャッシュレス化の流れにどうのせるかが課題。（Wifiの環境も必要）

【商店街に集客するしかけ】

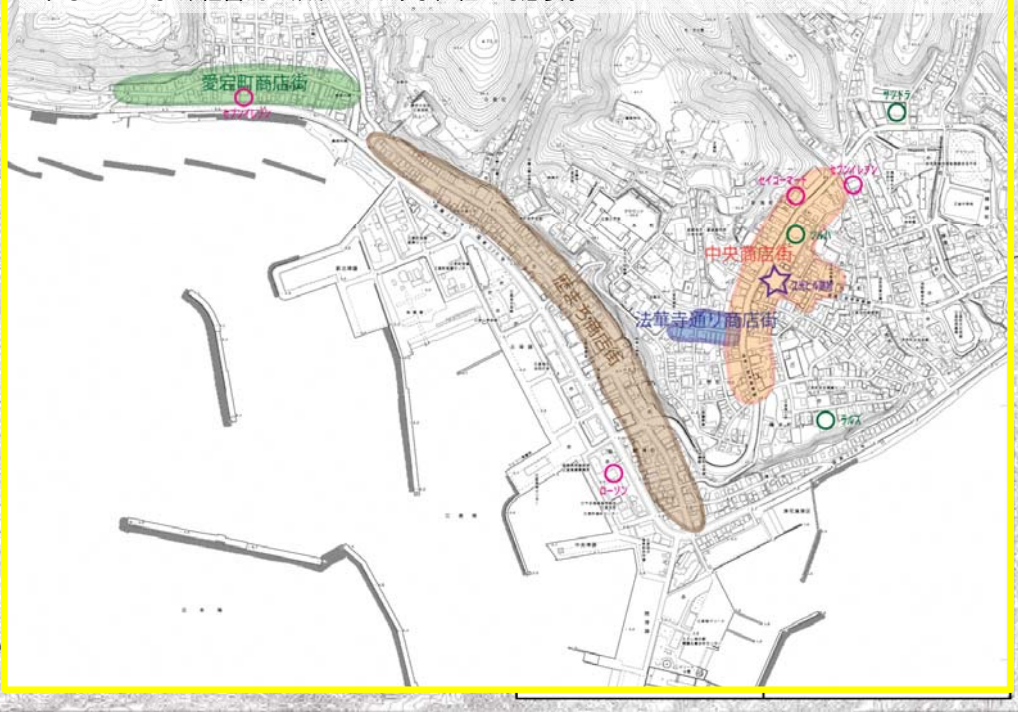
・商業だけで人を集めるのは難しい。例えばまちづくりカフェを江光ビル跡地で拡大し、多世代が集まる場所などが必要。商業以外に集まる場を作り、そのついでに買い物できる環境が必要。
・商店の品揃えだけでなく、「ここに来ないとこれができない」、という魅力が必要。
・江光ビル跡地は人を集め商店街振興の拠点となる何らかの方向性が出せるといいが、現時点では町長の提案に基づき交流スペースとスポーツジムの複合施設で検討を進めることにしている。
・昼間ばかりを考えがちだが、飲食店など夜に人が集まる取組も考える必要がある。
・イベントだけでは活性化の効果は期待できないことは留意すべきである。
・千歳のタウンプラザは地域の人が集まる拠点として参考になるかもしれない。
・北の江の島構想関連で、今年度からソフト事業を展開している。
・「仮説」で実証的な取り組みを行うことも重要。試しに動いてみて、人が集まるのかを検証（屋台のイベント、スポーツイベントなどは必要に応じ補助金を入れて）
・江差の魅力を詳細に発信する動画を創ったり、江差ファンでクリアイティブな人材を探して江差に呼び込むなどの取り組みが必要ではないか。
・町内でブランド力のある企業（五勝手屋羊羹など）が来街者向けに発信する拠点を創るのを支援してもよいのでは。（製造の見学・和菓子づくり体験などもできる）
・「三業懇話会」では、羊羹の昔ながらの原材料を復刻する取り組みも行っている。（五勝手屋羊羹は創業150周年を迎える）
・ベッキーの江差産スナップエンドウのパンも地域ならではのもの。
・江光デパート跡地にインスタ映えするからくり時計の設置がアイディアに挙がったこともある。

【その他】

・来街者へのおもてなし、リピーター確保の手立てとして、江差の綺麗な夕日のパネルを設置し、天気が悪くて夕日が見れない来訪者へも、次回また江差に見に来てくれることをメッセージとして送ることもよいのではないか。
・個人店舗も多いので、商店経営の担い手不足も課題である。
・江差町の知名度を活用し、訪れた人が商店街にお金を落としてもらうための方策も考えるべき。

【今後の上町、下町の商店街】

・上町、下町で日常の買い物（食料品・日用品）がなんでも揃う環境づくりを目指している。その中で足りないのは鮮魚店である。鮮魚がないために他の地区へ買い物客が流出するのを防ぎたい。
・上町と下町の連携にあたっては、既存の商店街のイベントの他にも新たなイベントを企画しなければならないのでは。そうなると動ける人も限られてくる。
・上町と下町は実際に空間的には距離がある。連携して活性化の効果を挙げるには、ただイベントをするのではなく、経営的に成り立つような仕組みも必要。



・上ノ国のトライマートは、北部地域を対象とした移動販売、店舗への送迎も行っている。

「まちづくりのツボ」に関する情報　【観光、関係人口、歴史、文化（祭り）】

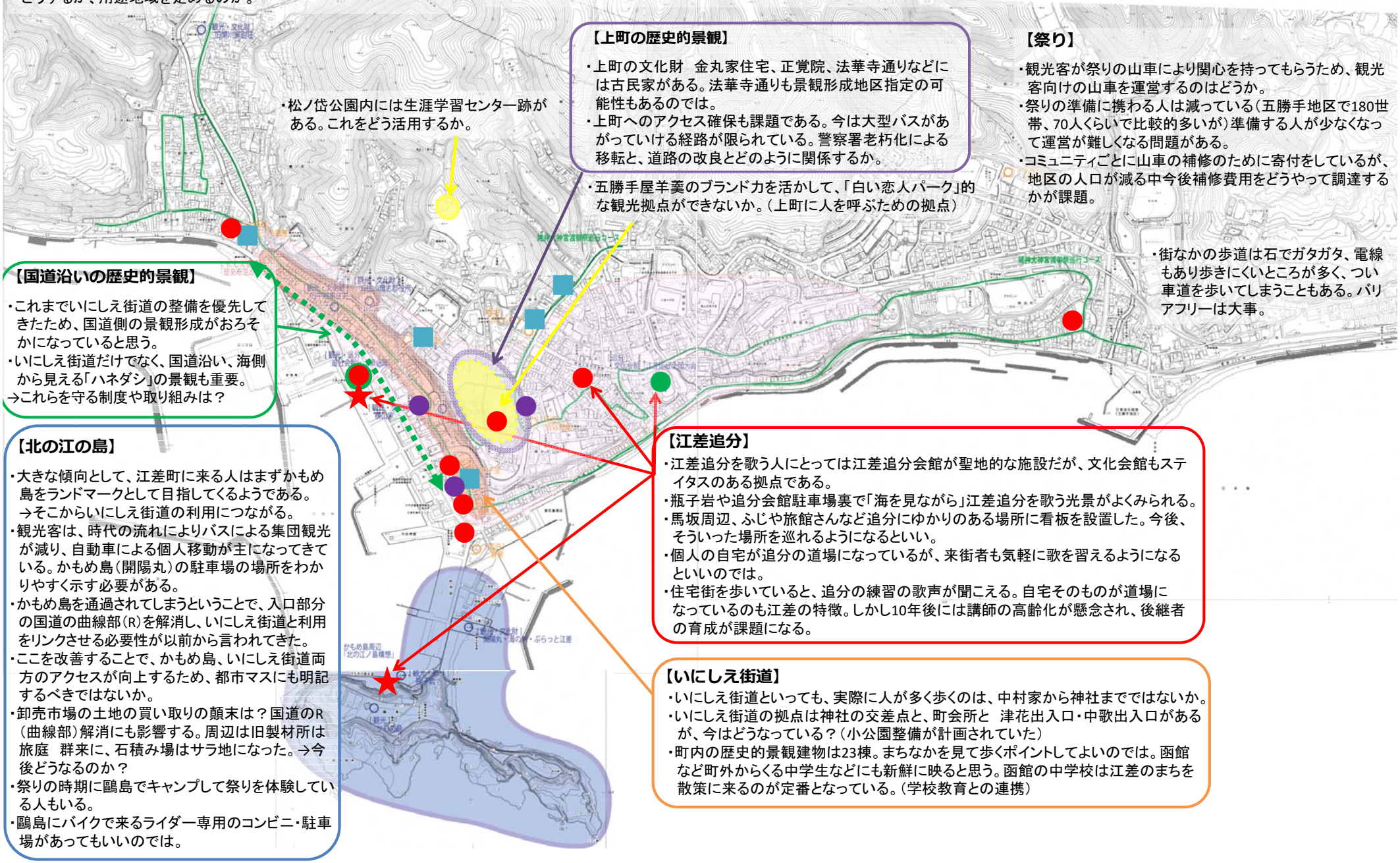
●	追　分　道　場
●	追　分　会　場
■	江差追分関連施設跡の看板
●	歴　史　的　建　造　物 （保存・活用に課題のあるもの）

【居住に対する意識】

・柳崎や利便性があり居住地として人気が高い。反面江差市街地には空きアパートが増えている現状である。
・柳崎地区に新しい賃貸住宅が多い。今後柳崎を含めた白地地域をどうするか、用途地域を定めるのか。

【江差ブランド】

・バスによる集団での観光が減り、車等による家族・個人単位での観光が今のトレンド。個人客を拾いやすいような拠点づくりが必要。かもめ島・開陽丸等。
・江差ブランドを考えたときに、「景観」のレトロさで江差らしさを出したり、「道の駅」や、「カーナビ」でランドマークとして出てくるものを考えたり、「かもめ島の眺望保全」などが重要。



・松ノ岱公園内には生涯学習センター跡がある。これをどう活用するか。

【上町の歴史的景観】

・上町の文化財　金丸家住宅、正覚院、法華寺通りなどには古民家がある。法華寺通りも景観形成地区指定の可能性もあるのでは。
・上町へのアクセス確保も課題である。今は大型バスがあがっていける経路が限られている。警察署老朽化による移転と、道路の改良とどのように関係するか。

・五勝手屋羊羹のブランド力を活かして、「白い恋人パーク」的な観光拠点ができないか。（上町に人を呼ぶための拠点）

【祭り】

・観光客が祭りの山車により関心を持ってもらうため、観光客向けの山車を運営するのはどうか。
・祭りの準備に携わる人は減っている（五勝手地区で180世帯、70人くらいで比較的多いが）準備する人が少なくなって運営が難しくなる問題がある。
・コミュニティごとに山車の補修のために寄付をしているが、地区の人口が減る中今後補修費用をどうやって調達するかが課題。

・街なかの歩道は石でガタガタ、電線もあり歩きにくいところが多く、つい車道を歩いてしまうこともある。バリアフリーは大事。

【国道沿いの歴史的景観】

・これまでいにしえ街道の整備を優先してきたため、国道側の景観形成がおろそかになっていると思う。
・いにしえ街道だけでなく、国道沿い、海側から見える「ハネダシ」の景観も重要。
→これらを守る制度や取り組みは？

【北の江の島】

・大きな傾向として、江差町に来る人はまずかもめ島をランドマークとして目指してくるようである。
→そこからいにしえ街道の利用につながる。
・観光客は、時代の流れによりバスによる集団観光が減り、自動車による個人移動が主になってきている。かもめ島（開陽丸）の駐車場の場所をわかりやすく示す必要がある。
・かもめ島を通過されてしまうということで、入口部分の国道の曲線部（R）を解消し、いにしえ街道と利用をリンクさせる必要性が以前から言われてきた。
・ここを改善することで、かもめ島、いにしえ街道両方のアクセスが向上するため、都市マスにも明記するべきではないか。
・卸売市場の土地の買い取りの顛末は？国道のR（曲線部）解消にも影響する。周辺は旧製材所は旅庭　群来に、石積み場はサラ地になった。→今後どうなるのか？
・祭りの時期に鷗島でキャンプして祭りを体験している人もいる。
・鷗島にバイクで来るライダー専用のコンビニ・駐車場があってもいいのでは。

【江差追分】

・江差追分を歌う人にとっては江差追分会館が聖地的な施設だが、文化会館もステイタスのある拠点である。
・瓶子岩や追分会館駐車場裏で「海を見ながら」江差追分を歌う光景がよくみられる。
・馬坂周辺、ふじや旅館さんなど追分にゆかりのある場所に看板を設置した。今後、そういった場所を巡れるようになるといい。
・個人の自宅が追分の道場になっているが、来街者も気軽に歌を習えるようになるといいのでは。
・住宅街を歩いていると、追分の練習の歌声が聞こえる。自宅そのものが道場になっているのも江差の特徴。しかし10年後には講師の高齢化が懸念され、後継者の育成が課題になる。

【いにしえ街道】

・いにしえ街道といっても、実際に人が多く歩くのは、中村家から神社までではないか。
・いにしえ街道の拠点は神社の交差点と、町会所と　津花出入口・中歌出入口があるが、今はどうなっている？（小公園整備が計画されていた）
・町内の歴史的景観建物は23棟。まちなかを見て歩くポイントしてよいのでは。函館など町外からくる中学生などにも新鮮に映ると思う。函館の中学校は江差のまちを散策に来るのが定番となっている。（学校教育との連携）

「まちづくりのツボ」に関する情報 【まちづくり活動】

【まちづくりカフェ】

・地域の互助力を強化するため、把握する「地域支え合い協議体」実働部隊である「まちづくりカフェ」で活動を展開。今年4年目を迎える。江差では「まちづくりカフェ」の活動が先行。

・まちづくりカフェは4つのプロジェクトで構成
・ものづくり 「針刺し」づくり、郷土菓子「こうれん」づくり
・自給自足　食を通じた町内会活動のきっかけづくり、鍋まつり参加も
・ウォーカーズ　駐車場でラジオ体操
・蔵プロジェクト　様々な主体の人がつながって社会参加

【蔵プロジェクト】
・消費者協会やフラワーマスターなどから参加、例）バザー、交通安全講習
・役場から外に出て“蔵”を生かしたまちづくりを、という考えから名づけられた

・まちカフェメンバー（加入者数）は現在横ばい

・今は進んでないが、「相乗り」を検討するプロジェクトもあったが、いまも、昔からの人の支え合いの大事さを伝える活動。

・今後は町内会、民生委員など、様々な主体が繋がって地域を支えていく必要がある。

【活動の理念について】

・町内会活動の担い手の高齢化の問題
→地域の壁がとれて活動していく人が出てくる。“まち全体をフラットに”して人づきあいしやすい環境を作るのが大事
・個人主義で自己責任の時代が長く続いたため、互助の考え方が薄れてきたともいえる。その結果、集いに呼び掛けても来ない人もいる。人と会いに出かけたくない人も7割くらいいるのではないか。
・これからの高齢化社会では、「自己責任」から「お互いさま（助け合い）」という意識改革が必要。

・ まちカフェのメンバー間では、「支え合い・助け合い」の気持ちが根底 にあり、いい関係が出来上がっている。
・五勝手町内会では、町内会の壁をまたいで南が丘小学校の生徒や保護者で希望するものとカレーパーティー等のイベントをおこなうことが計画されている。
・日本の町内会は地域の助け合いの単位として海外からその良さを注目されている。

・このような住みやすいまちにするための活動は、個人の意識を変えていくことなので、そのような人を時間をかけて地道に増やしていくしかない。

・高齢者問題・支え合い問題・見回り問題は、一つの機関だけでは、解決できない。まちカフェ・町内会・民生委員等を一つに繋げていかなければならない。マザーシップ精神があれば、まちが必ず良くなる。まちカフェの取り組みに若い人が気づいてくれるだけでも大きな意味がある。

【まちづくりカフェ活動拠点】

・今年4月より活動拠点場所を開設（桧山ハイヤーさん下）

・5月の来所者はのべ250人
・ふらっと施設を寄る人もいれば、子育て中の親子連れ、子どもがおやつを持参して時間つぶしに来ることも。

・ウォーカーズ　駐車場でラジオ体操

・ヒアリング当日も小・中学生20名が参加の木工のイスづくりのワークショップを開催。

「まちづくりのツボ」に関する情報　【公共交通】

N

【公共交通施策の現状（まちづくり推進課）】

・まちづくりサイドの施策としては路線バスの赤字補填（年間1,800万円）がある。木古内からのJR線廃止に伴い9億円が交付され、これを18年かけて地域の足の確保に使っていく。
・乗車密度の低い路線が多く、上ノ国のまちなかから道立病院までの路線（通学・通院）がかろうじて乗車密度を保っている。
→バスの利用促進が喫緊の課題。
・乗合タクシー（桧山ハイヤー）：鰍川～小黒部のバスを廃止したことにより、主に北部の住民が利用し小黒部で乗り降りできるが、鰍川の人にとっては不便に感じており改善の要望が上がっている。小黒部のバス停には庇のある待合所がないことも待合環境として課題である。月30～40件の利用がある。

【公共交通の現状（町民福祉課）】

・町民福祉サイドとしては福祉タクシー助成がある。町内の対象者は200人でそのうち30人の交付申請がある。平成30年度から利用目的（通院）の要件を外し、町内限定で通院以外の目的にも利用できるようにした。（年間24,000円相当の助成）最終的に利用割合は3～4割にとどまっている。
・課題として町内のタクシー事業者が減ったことにより利用が上がらないことがある。
・上ノ国発達支援センターへの移送支援には、バスだと1/2補助、自家用車だと片道210円の補助を行っており、20世帯弱の利用がある。一番利用の多い世帯は130回ほど利用している。

【北部地区】

・乗合タクシー：小黒部を中継とした乗合タクシーサービス
→南部地区とのサービス水準のバランスを考慮する必要がある。
・北部でも、交通量が少ないのでバスの“フリー乗降”が有効かもしれない。
・北部地区と南部地区にはバスの運行が少ない。市街地の外側の人たちを、市街地にどう呼び込むか。

【公共交通施策の現状（高齢あんしん課）】

・「高齢者の足」ニーズあるが本当に必要なのか。（お金を払える、歩けるなど切迫していない人もいるかもしれない）、生活支援コーディネーター（3名）による実態調査では北部地域はコミュニティ全体で乗合の取り組みにより自分達で協力して交通手段を賄っている。従って、公共交通にニーズは中心街のお年寄りの方が多い印象。
・公共交通サービスでなくとも介護が必要な方には介護ヘルパーに依頼、子どもや配偶者、配偶者による送迎、町内医療機関の送迎車など利用できるものは幾つかある。
・NPOの有償の移送サービスもある。これは北部より中心部の利用が多い。タクシーの半額以下で利用できる。
・社協の移送サービスは区間一律150円
・福祉有償運送は町内3事業所で実施。（まちづくり推進課所管）
・町のバスを使うこともある。（団体遠乗りの場合40人バス、拠点間の移送は20人バス、尾山町の温泉など結ぶ）
・介護予防事業では7人乗りの車で移送。
・高齢化が進む中、全ての高齢者に一律の水準のサービスを提供するのは困難。
・タクシー助成も試算したが費用が膨大になる。
・高齢者へのバスの半額助成も行っている。

【全町的な課題】

・福祉有償運送を拡大・充実していくと、タクシー事業者への民業圧迫になる恐れがあり、慎重に検討していく必要がある。
・スクールバスの一般客の混乗はこれまでも検討されてきたが、調整がうまくいかなかった経緯があり実現していない。
・免許返納問題。今は大丈夫でも10年後移動の足がどうなるのか、不安に思う人が多い。→免許を手放せない人も出てくる。
・過去運行した買い物バスには人が乗ったが路線バスには乗らない→運行時間なのか、運賃なのか（買い物バスは無償）
・国では過疎地域には「集落支援員」を配置し、高齢者の生活をサポートすることへの支援を行っている。（江差町は過疎地域に指定）
・函館市ではICカード「ICAS nimoca (イカすニモカ)」を導入（ポイント還元ができる）江差ではポイント還元の機械を導入できていない。
・昔はお年寄りの行き来を家族や近隣の人が支えることができた。そのような若い世代が少なくなった。
・北部地区と南部地区にはバスの運行が少ない。市街地の外側の人たちを、市街地にどう呼び込むか。
・津花にバス停がなく津花から北電まで歩きにくい人もいるが、バス停からどのくらい離れれば不便なのか、個人の感覚により違うと思われる。

【今後の考え方】

・サービスありきでの検討でなく、利用者側のニーズに必要なサービスを想定しあてがい、必要なサービスを考えていく必要があるかもしれない。
・例えば今ある9本のバス路線のうち、3本をやめて域内フィーダーに切り替えるなど。
・北欧では健常者含めた町民から年間一定額を徴収し、公共交通を乗り放題にするやり方もある。払ったのだから利用する意識も生まれる。そういった制度も組み入れられる可能性があるかもしれない。

【市街地内】

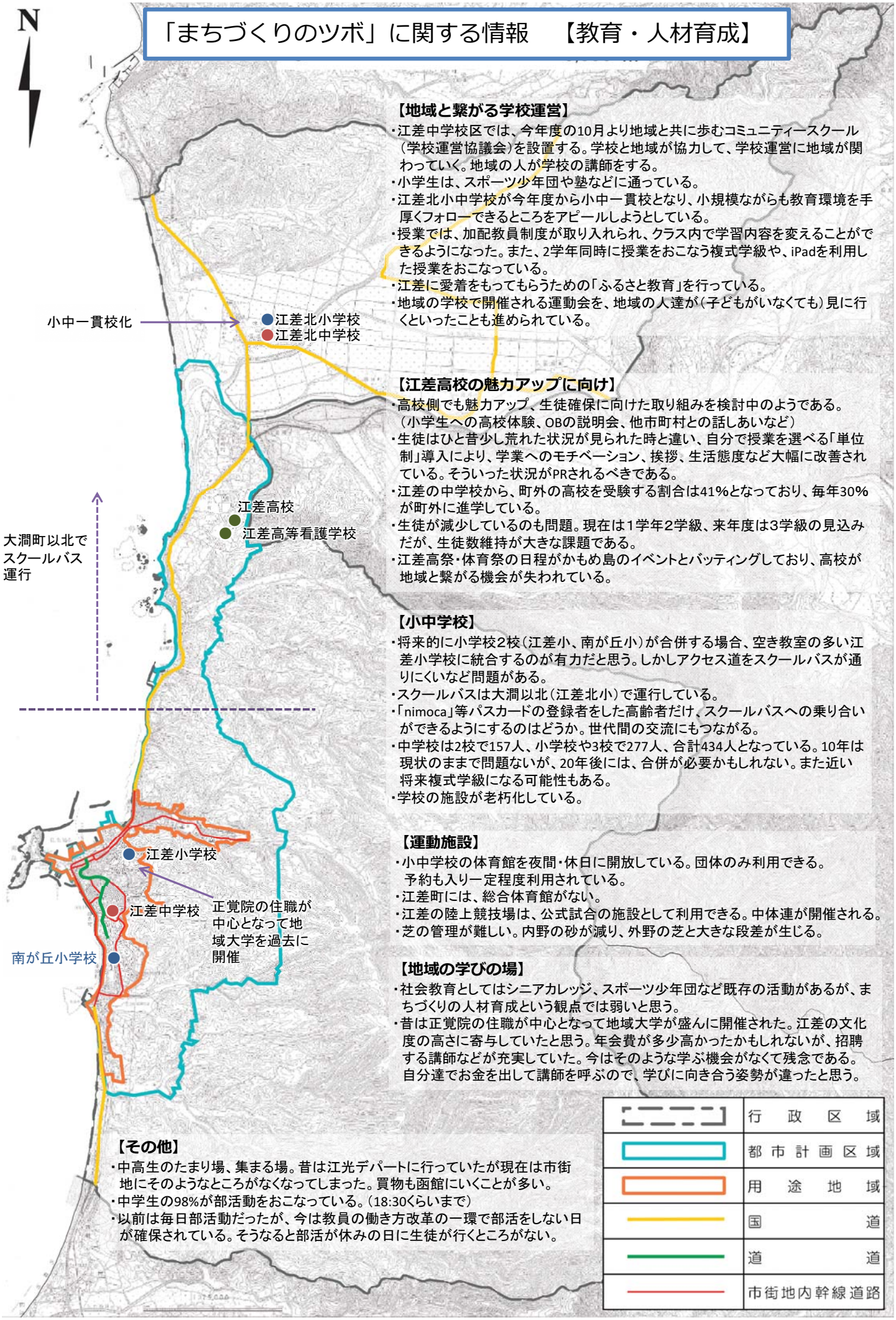
・国道から外れた市街地内であれば、交通の多いバス路線と違うルートで“フリー乗降”を実施できる可能性があるのではないか。また、必要な場所に庇のある乗降場を設置するのもよいかもしれない。

【その他】

・トライマートの送迎バスは、お店への送迎のほかに、買物ついでに通院もできるよう配慮されている。
・豊頃町のライドシェアの実証実験の事例
・上ノ国町でも区間によって“フリー乗降”にしているところがあると聞く。
・温泉バスを拡充しての移送の事例があるが、うまく行かなかった理由として、利用促進のための乗り方の周知がうまく行かなかったことがあるという。試しに載る機会を設けたり、乗り方を上手く周知する方法を考える必要がある。

	行政区域
	都市計画区域
	用途地域
	国道
	道道
	市街地内幹線道路

「まちづくりのツボ」に関する情報　【教育・人材育成】



【地域と繋がる学校運営】

・江差中学校区では、今年度の10月より地域と共に歩むコミュニティースクール（学校運営協議会）を設置する。学校と地域が協力して、学校運営に地域が関わっていく。地域の人が学校の講師をする。
・小学生は、スポーツ少年団や塾などに通っている。
・江差北小中学校が今年度から小中一貫校となり、小規模ながらも教育環境を手厚くフォローできるところをアピールしようとしている。
・授業では、加配教員制度が取り入れられ、クラス内で学習内容を変えることができるようになった。また、2学年同時に授業をおこなう複式学級や、iPadを利用した授業をおこなっている。
・江差に愛着をもってもらうための「ふるさと教育」を行っている。
・地域の学校で開催される運動会を、地域の人達が（子どもがいなくても）見に行くといったことも進められている。

【江差高校の魅力アップに向け】

・高校側でも魅力アップ、生徒確保に向けた取り組みを検討中のようである。（小学生への高校体験、OBの説明会、他市町村との話しあいなど）
・生徒はひと昔少し荒れた状況が見られた時と違い、自分で授業を選べる「単位制」導入により、学業へのモチベーション、挨拶、生活態度など大幅に改善されている。そういった状況がPRされるべきである。
・江差の中学校から、町外の高校を受験する割合は41%となっており、毎年30%が町外に進学している。
・生徒が減少しているのも問題。現在は1学年2学級、来年度は3学級の見込みだが、生徒数維持が大きな課題である。
・江差高祭・体育祭の日程がかもめ島のイベントとバッティングしており、高校が地域と繋がる機会が失われている。

【小中学校】

・将来的に小学校2校（江差小、南が丘小）が合併する場合、空き教室の多い江差小学校に統合するのが有力だと思う。しかしアクセス道をスクールバスが通りにくいなど問題がある。
・スクールバスは大澗以北（江差北小）で運行している。
・「nimoca」等パスカードの登録者をした高齢者だけ、スクールバスへの乗り合いができるようにするのはどうか。世代間の交流にもつながる。
・中学校は2校で157人、小学校や3校で277人、合計434人となっている。10年は現状のままで問題ないが、20年後には、合併が必要かもしれない。また近い将来複式学級になる可能性もある。
・学校の施設が老朽化している。

【運動施設】

・小中学校の体育館を夜間・休日に開放している。団体のみ利用できる。予約も入り一定程度利用されている。
・江差町には、総合体育館がない。
・江差の陸上競技場は、公式試合の施設として利用できる。中体連が開催される。
・芝の管理が難しい。内野の砂が減り、外野の芝と大きな段差が生じる。

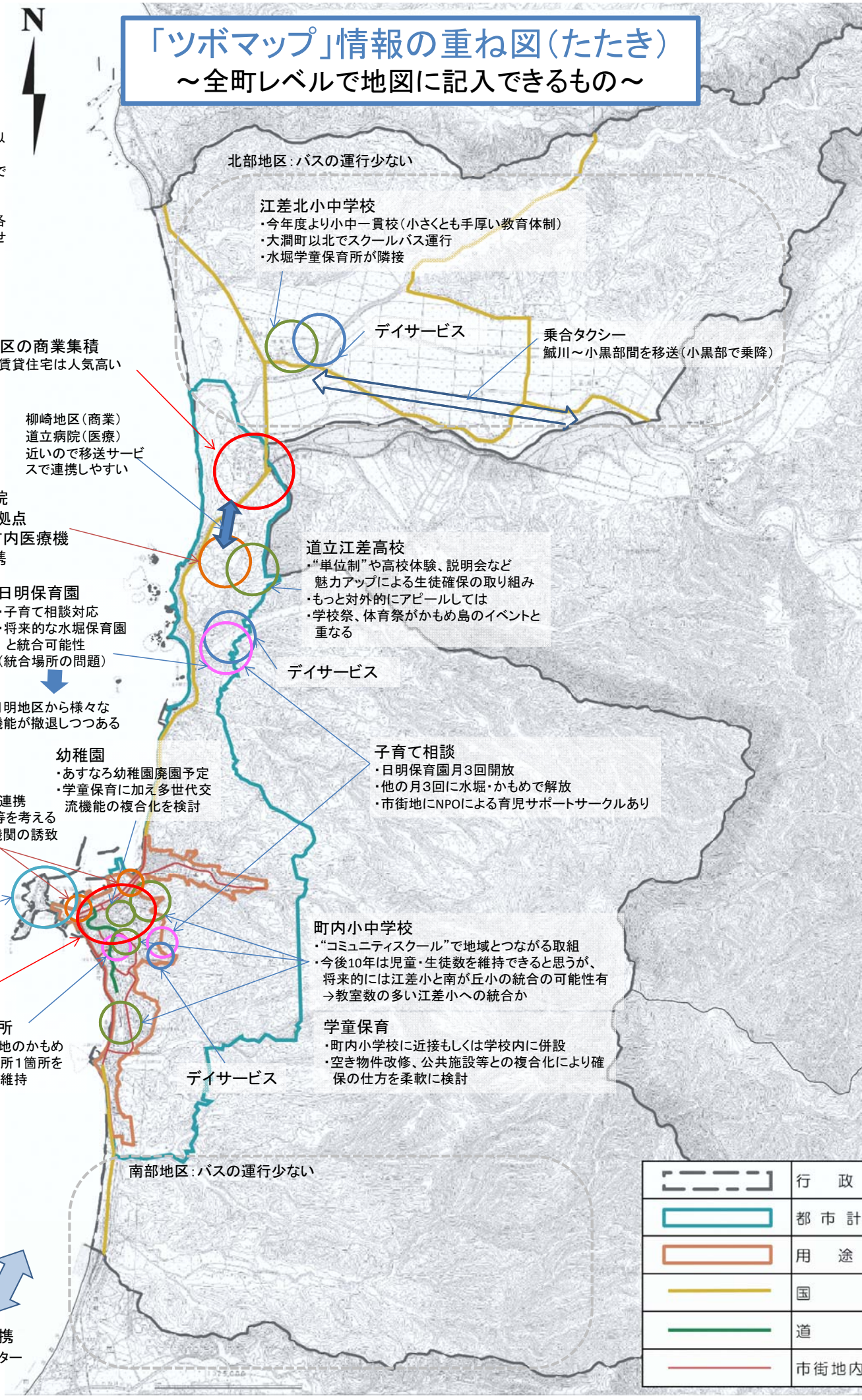
【地域の学びの場】

・社会教育としてはシニアカレッジ、スポーツ少年団など既存の活動があるが、まちづくりの人材育成という観点では弱いと思う。
・昔は正覚院の住職が中心となって地域大学が盛んに開催された。江差の文化度の高さに寄与していたと思う。年会費が多少高かったかもしれないが、招聘する講師などが充実していた。今はそのような学ぶ機会がなくて残念である。自分達でお金を出して講師を呼ぶので、学びに向き合う姿勢が違ったと思う。

【その他】

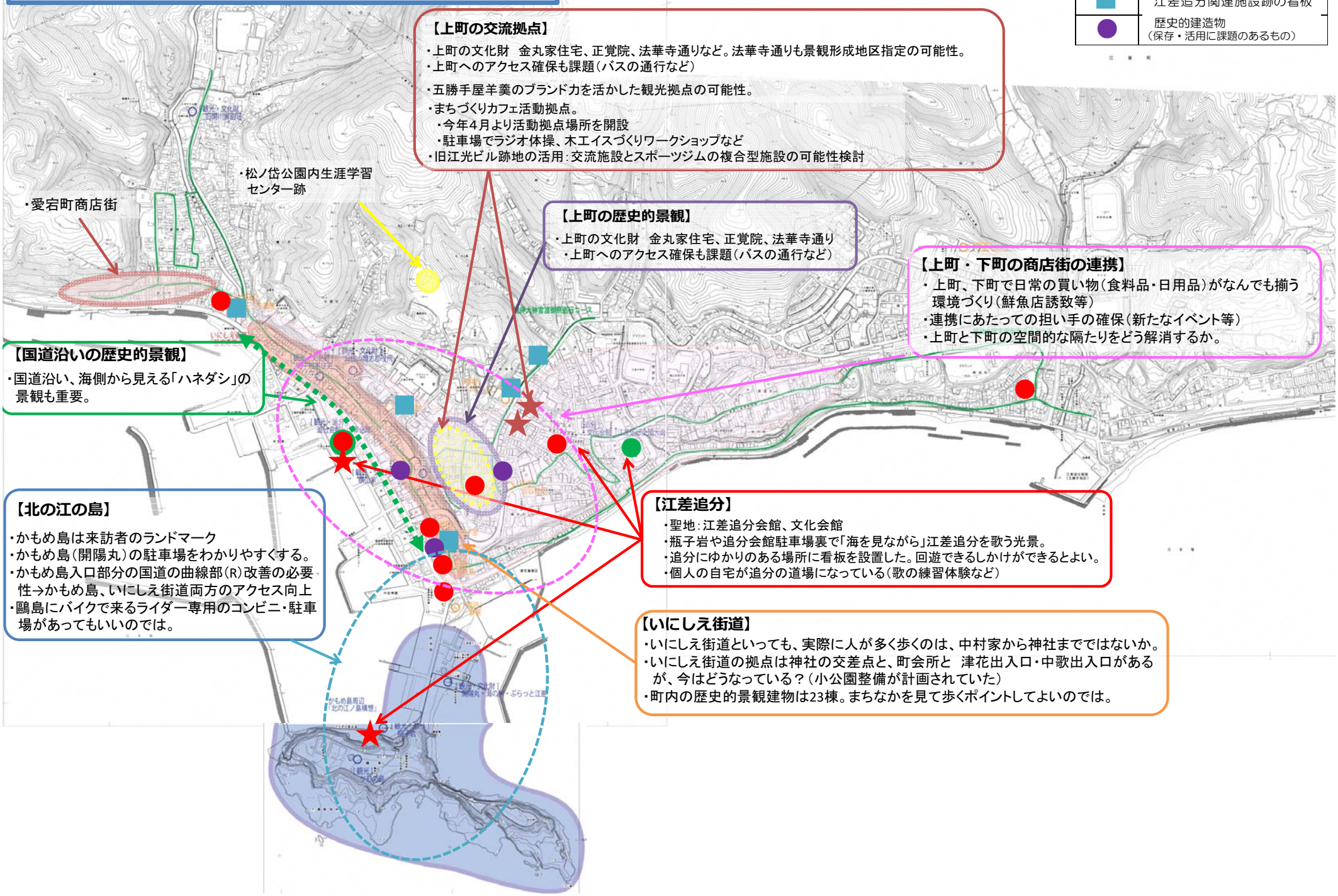
・中高生のたまり場、集まる場。昔は江光デパートに行っていたが現在は市街地にそのようなところがなくなってしまった。買物も函館にいくことが多い。
・中学生の98%が部活動をおこなっている。（18:30くらいまで）
・以前は毎日部活動だったが、今は教員の働き方改革の一環で部活をしない日が確保されている。そうなると部活が休みの日に生徒が行くところがない。

「ツボマップ」情報の重ね図（たたき）
～全町レベルで地図に記入できるもの～



「ツボマップ」情報の重ね図（たたき）
～市街地レベルで地図に記入できるもの～

●	追　分　道　場
●	追　分　会　場
■	江差追分関連施設跡の看板
●	歴史的建造物 （保存・活用に課題のあるもの）



【上町の交流拠点】

・上町の文化財　金丸家住宅、正覚院、法華寺通りなど。法華寺通りも景観形成地区指定の可能性。
・上町へのアクセス確保も課題（バスの通行など）

・五勝手屋羊羹のブランド力を活かした観光拠点の可能性。
・まちづくりカフェ活動拠点。
　・今年４月より活動拠点場所を開設
　・駐車場でラジオ体操、木工イスづくりワークショップなど
・旧江光ビル跡地の活用：交流施設とスポーツジムの複合型施設の可能性検討

【上町の歴史的景観】

・上町の文化財　金丸家住宅、正覚院、法華寺通り
・上町へのアクセス確保も課題（バスの通行など）

【上町・下町の商店街の連携】

・上町、下町で日常の買い物（食料品・日用品）がなんでも揃う環境づくり（鮮魚店誘致等）
・連携にあたっての担い手の確保（新たなイベント等）
・上町と下町の空間的な隔たりをどう解消するか。

【国道沿いの歴史的景観】

・国道沿い、海側から見える「ハネダシ」の景観も重要。

【北の江の島】

・かもめ島は来訪者のランドマーク
・かもめ島（開陽丸）の駐車場をわかりやすくする。
・かもめ島入口部分の国道の曲線部（R）改善の必要性→かもめ島、いにしえ街道両方のアクセス向上
・鷗島にバイクで来るライダー専用のコンビニ・駐車場があってもいいのでは。

【江差追分】

・聖地：江差追分会館、文化会館
・瓶子岩や追分会館駐車場裏で「海を見ながら」江差追分を歌う光景。
・追分にゆかりのある場所に看板を設置した。回遊できるしかけができるとよい。
・個人の自宅が追分の道場になっている（歌の練習体験など）

【いにしえ街道】

・いにしえ街道といっても、実際に人が多く歩くのは、中村家から神社までではないか。
・いにしえ街道の拠点は神社の交差点と、町会所と　津花出入口・中歌出入口があるが、今はどうなっている？（小公園整備が計画されていた）
・町内の歴史的景観建物は23棟。まちなかを見て歩くポイントしてよいのでは。